

ベトナムの視覚障害者教育の現状について

筑波技術短期大学鍼灸学科¹⁾ 柿生眼科²⁾ 社会福祉法人桜雲会（前筑波技術短期大学）³⁾

一幡良利¹⁾ 久城初江²⁾ 高橋昌巳³⁾

要旨：平成13年8月5日から8月13日まで、ベトナムのホーチミン市、ダナンの盲学校並びに盲人協会の各施設を訪問する機会にめぐまれ、視覚障害者教育の現状を把握することができたので、その問題点を含めて考察する。

キーワード：ベトナム 視覚障害者 障害学生 教育 マッサージ

1. はじめに

1960年から1975年までのベトナムは15年間の長期に亘るベトナム戦争で、連日報道関係をにぎわしていた。しかし戦後、日本でのベトナム報道は新聞の片隅に追いやられてきた。その間わずかな報道でも暗いものが多く、カンボジアでの戦争、中国との戦争、難民流出、枯葉剤の後遺症、経済困難、共産主義で官僚主義の国というイメージがまつわりついていた。しかしながら1987年のドイモイ開放経済政策[1]、1989年以降外資の本格導入により、アジア最後の市場として活性化してきた。この頃から一般教育についても国策として力をいれてきた。しかし障害児に対する教育としての学校は少なく、全障害児を受け入れる体制もない現状である。したがって職業自立に対する教育も未だ完全でないのはいうまでもない。今回、その中でも南部と中部地域にある盲学校並びに盲人協会、知的障害児教育センターを訪問したのでその現状とベトナムの教育事情との関係について解説する。

2. 障害児の数

ベトナムでは障害児の実態が把握しにくい国で、1993年の調査報告[2]によると障害児と関係がある政府機関で、例えば教育・訓練省、医療省、労働将兵社会省が障害児数を出している。その調査結果では15歳以下の障害者数を100万人としている。そのうち重度障害者は31%を占めるといわれている。しかしこの時点での調査には高山部や南部は含まれず、18の地域での調査結果による。その他の設立機関であるベトナム小児の健康とリハビリテーションセンターでは、全国53省3特別市（ハノイ、ホーチミン、ハイフオン）の中の20省の調査を行い、300万人という概算報告[2]もある。数字が異なるのはそれぞれの省が、その省に所属する機関に障害児数を調査させ、個別の小児より統計を出していることに原因があると思われる。一方では、障害児が家庭にいと、一族の恥として家の中に隔離し、障害児を外へ出さないために

その実数が把握できないのも一因である。従って、障害児の実数[3]は統計的数値よりも更に多いと推測される。

3. 障害児の状況

悲観的見方としてはほとんどの障害児は家にいるだけで、なにもしない状況[2]におかれている。農村部では障害児は悪霊の取り付きであるとか、前世が悪かった報いと思われており、家庭の恥として見られ外に出さないことが多い。また、大多数の障害児は医療も教育も受けられない。親は貧しくて障害児を病院にも連れて行くことが困難であることは言うまでもない。親が障害児を学校へ連れて行っても、学校や教員が児童を容易に受け入れる体制にはなっていない事実が多い。地域の児童保護委員会が、どの家庭にどんな種類の障害児がいるとわかっていても年2回程度家庭訪問する以外何も積極的対策は施されていない。一方で希望のもてることはそのような障害児を集め、私塾を設立し個人教育をする先生や聴覚障害児のための特殊クラスを作った普通小学校長の存在[2]がある。ベトナム盲人協会の各支部では盲児クラスの設置や、ベトナムリハビリテーション協会により全国53省の中で20省が障害児の教育に積極的な推進を計ってきている。また日本の視覚障害者支援団体である社会福祉法人桜雲会、非政府組織(NGO)のBridge Asia Japan(BAJ)及び日本財団による視覚障害者の職業自立支援のためのマッサージ教育と施術所設立支援が実を結びつつある。

4. 視覚障害者の数

障害児の数と同様に、視覚障害者の実数をもっと明白でない。例えばホーチミン市の盲人協会に所属しているヒトは4000名。ベトナム盲人協会には17の支部があり、会員が23000名登録されており、盲児や盲人協会に加盟していないヒトを加えると、その数は数万人に達すると言われている[3]。1996年の統計ではベトナムの総人口は約7540万人である。

5. 視覚障害の原因

ウイルス疾患である麻疹（いわゆるハシカ）が70%を占めるといわれ[4]、栄養失調（特にビタミンAの不足）を伴って失明すると考えられる。他に、出産時の事故、ベトナム戦争時の枯葉剤（大量のダイオキシン類）の散布による後遺症、先天性疾患によるものなどがあるが、眼科学的には早期治療により、失明の危機を免れる患者も多く、最先端医療技術の支援も残された重要な課題である。

6. ベトナムの教育

1992年新憲法35条に「教育と養成はもっとも大切な国策である。国家の教育発展は、国民の教育水準を高め、人材を養成し、英才教育をするということを目指す。」とされている[5]。また、36条には「国が、幼稚園、普通教育、職業教育、大学と大学院教育、小学校教育普及、文盲一掃という教育の構成を均等に発展させ、公立学校、私立学校および他の教育形式を発展させる。国が、他の資金源の奨励を含め、教育に投資を優先する。国が、山岳地帯、少数民族の地域、貧困地域における教育に優先的な政策を保証し実現する。」と明記され教育の充実と文盲率の減少に国を挙げて提唱している。1998年の成人の識字率は94%（ユネスコ世界教育白書統計による）に到達している。更に1998年には新教育法も国会で承認され、国民の教育水準を高め、人材を養成し、英才教育をすることを目標としている。

6. 1 一般教育

小学校5年（6歳から入学）、中学校4年、高等学校3年、大学4年、医科大学6年及び高等専門学校3年（短期大学に相当するものもある）がある。小学校は義務教育が行われている。小学校数は14000校あり、就学率は90%、卒業率68%（小学校局による1996年の統計より）である。学習科目はベトナム語、算数、道徳、自然と社会、音楽と美術、保健体育、及び課外活動がある。普通の小学校にいけない子供や、貧困地域、メコンデルタ地域及び山岳地帯の子供には別に集中教育指導計画がある。中学校が未だ義務教育化されていない最大の原因は教師が全国で2万人不足しており、何とか充足し義務教育としたいが、今のベトナムの経済状況からは無理である。将来は都市部から目指せるようになると思われる。中学校数は7993校で、就学率50%、卒業率は37%（中学校局による1996年の統計）である。学習科目はベトナム語、

作文、歴史、地理、公民教育、数学、物理、化学、生物、体操、外国語、技術労働、課外活動である。高校は1344校あり、理系高校と文系高校も設置されている。就学率20%、卒業率19%である。この他、義務教育（小学校）を終えて、社会にでたものには文化補習課程（社会教育）があり、試験により専門中学校と職業訓練学校に進むこともできる。大学は58校あり、総合大学；4校、師範大学；10校、外語大；1校、法律大学；2校、工業・技術大学；11校、農林水産大学；6校、経済大学；8校、医科大学；5校（ハノイ市、ホーチミン市、フェ、タイグエン、タイビンにある）、薬科大学；1校、体育大学；2校、文化・芸術大学；8校ある。大学は狭き門で進学率は3%に過ぎず、卒業しても就職率が極めて低い。

6. 2 障害者教育

障害者教育のための学校はドイモイ政策以降推進されるようになった。欧米や日本のNGOなどから資料の提供やセミナーの実践によって、知識並びに技術導入されているところである。学校は1990年以降に建てられたものが多い。小学校の教育年限は障害に応じて異なり、一般の教育が5年であるが、視覚障害者は6年、聴覚障害者は8年、知的障害者は9年である。これは、障害者教育は職業訓練課程を組み込んで、午後をその時間に当てるため、卒業する期間が延長される。途中普通学校に編入し、中学校、高校、大学へも進学することができる。しかし、障害者教育に関する専門家が少なく、教員が障害者に対する理解が無い限り、普通の中学校、高校へ進学はできない。したがって進学率は10%前後と言われている。現在学校へ通っている生徒数は、全障害児数の35%くらいと報告[3]されている。その他私塾として経営している学校もでき始めてきた。今回訪問したホーチミン市郊外にあるマイ・アン盲学校は代表的私塾で、1999年に開設され、設立者が10年前に交通事故により失明し、翻訳出版業の傍ら、教会の支援を受け、それらを収入源として本校を運営している。年齢は16から24歳で、6名の学生が校舎内で生活している。コンピュータ（写真1）、英語、音楽の授業を取り入れ、週1回は東方医学院から講師を招き、マッサージ教育も受けている。小学課程の学生は正規の試験はホーチミン市にある盲学校で受ける。近くの中学校に通学している学生は、正規の試験をそこで受けて卒業するしくみになっている。



写真1 マイ・アン盲学校でのコンピュータ学習

6. 3 障害児対象の学校数と生徒数

障害児のための学校総数[6]は66校で、盲学校13校(生徒数506名、教員数101名)、聾学校36校(生徒数、2506名、教員数401)、知的障害児学校17校(生徒数665名、教員数52名)ある。その他、センターと呼ばれる重複障害者対象の生徒がいる学校が12校ある。これらの中には普通小学校の中にある特殊クラスは含まれていない。また、障害児のいる学校は省・特別市に偏っており、ホーチミン市には16校、ハノイ市には8校と集中しているが、障害児学校が1つもない省も存在[3]する。

6. 4 盲学校の現況

視覚障害者の数に比較して、学生数が少ない。この理由は選抜して入学させるのか、あるいは家庭から外へ出さないのかは不明である。例えば、ホーチミン市126名、ハノイ市86名、ハイフォン市56名、ダナン省47名と506名中315名(62.3%)が都市部に集中している。就学年齢は6から15歳とされているが、20歳代を超えている人も存在[3]している。特に地方の盲学校では年齢差が大きいといわれている。

6. 5 盲学校の教育

ベトナムの現状と同じく、地域によって異なる。ホーチミン市の盲学校(正式名称はグエンディンチュウ盲学校)はベトナムでも最も歴史の古い学校(写真2)で、1926年設立、1975年以降ホーチミン市教育局に所属している。現在の学生数は165名、(男子102名、女子63名)教職員数は54名で高校までの一貫教育がなされている。ちなみにグエンディンチュウ(写真3)はベトナムの有名な盲目の詩人の名前前で盲学校に氏の名前をつけた学校

が多く、学内に銅像が置かれていた。ハノイ市の盲学校は中学までの一貫教育であるが、マッサージを行っている学生や音楽院へ進む学生がいることから高校まで進むことができる。本校の特徴は最初盲学校として設立されたが、普通校を増設させ、晴眼者の中に視覚障害学生と一緒に勉強させている。即ち、各クラスに4から5名の優秀な視覚障害学生を受け入れており、能力的に一般学生と無理な場合は別に教育するという体制をとっている。これらホーチミン市やハノイ市の盲学校[3]からは大学進学率も10%と高く、普通高校からの大学進学率よりはるかに高い教育が行われており、他の盲学校とは異なっている。ハイフォン市の盲学校は小学校のみで2部授業を行っている。ダナン省の盲学校、ここもグエンディンチュウ盲学校という。本盲学校は1992年9月に設立され中学校、高校課程の学生は、盲学校から市内の普通中学校、高校へ通学し、統合教育を受けている。在校生の中に師範大学への進学希望者がおり、将来の障害者教育を担う人材を育てている。



写真2 ホーチミン市のグエンディンチュウ盲学校



写真3 グエンディンチュウ像

6. 6 盲学校の職業教育

一般にはハウキ作り、つま楊枝作り、音楽、マッサージ、その他が職業自立としてある。職業教育は中学校と高校で行うことになっているが、小学校で職業教育を行っているところもある。カリキュラムそのものが未だ定められていないので地域差が著しく異なっている。各学校で共通[4]することは、マッサージを何処の盲学校でも力を入れてきている職域としている。特に、ホーチミン市とハノイ市では伝統病院の医師がきて直接指導しているが、実技中心で体の構造と機能などの講義は殆ど行われていない現状であるのが残念である。一方、ベトナム中部地域にあるダナン省の盲学校での職業教育は音楽、踊り、マッサージに取り組んでおり、職業教育の指導教員は非常勤講師として特別に来校している。マッサージについては第二中央医療技術学校より先生が派遣され指導を受けている。マッサージ師になるための資格は省により異なっているが、通常養成課程を修了し、医療の専門分野の試験に合格し、証明書(写真4)を交付される。視覚障害者の場合4年にかかるといわれているが明確ではない。現在ベトナムでは医学知識がなく、無資格でマッサージを行っているケースがある。今後、日本で行っているような視覚障害者の仕事として国が認定するような制度にしたいと指導者の人たちは述べている。

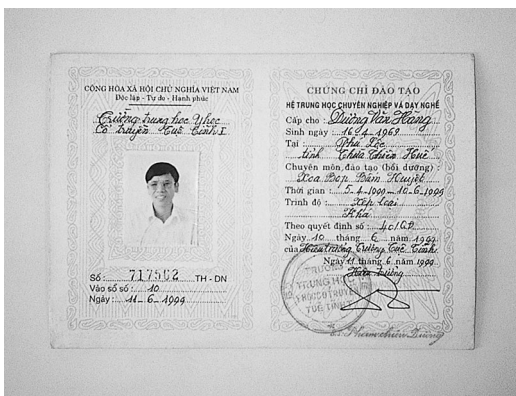


写真4 マッサージ師証明書

6. 7 盲学校卒業生の就職

小学校で卒業することが最も一般的である。中学校、高校の進学率は低下がみられるが、普通校の学生よりも高い。卒業生の就職先は地域の盲人協会が主催しているハウキ作りか、つま楊枝作りであるが、これらの仕事では自立できない現況 [3]にある。ここにベトナム南部で最も中心的役割を果たしているホーチミン市グエンディンチュウ盲学校での20年間(1977年から1997年)の動向

を見てみると318名の学生を受け入れ、202名の卒業生を出している。その内、193名(95.5%)が小学校卒業程度の学力を備え、上級学校への進学・卒業は13名(6.4%)いる。しかし全国の15歳以下の児童数と比較すると、視覚障害者の生徒の通学率は6.6%にしか満たない。更に、中学卒業後の進路では高校、短大に進学する生徒は24名(11.8%)であるが、健常者に比べかなり低い。大多数の生徒82名(40.6%)は視覚障害者協会や教師、音楽家として働いているが、77名(38%)の生徒が家庭で社会へ出て働く機会を待っている。それ故に本校では1997年に2部屋からなるマッサージルームを開設した。また1999年7月に日本の桜雲会とBAJ、日本財団の援助によるマッサージルームを1棟増設した。開設から3年間で66500名の施術を12名のマッサージ師が行い、ホーチミン市での健康マッサージセンターとして視覚障害者教育に重要な役割を果たしている。今後卒業生の増加に伴い、開院、スポーツクラブ、美容サロンなどへ新しい職域開拓に力を入れている。一方、ダナンの盲学校でも上記日本の支援団体の援助により、2000年、2月からマッサージルームを開設し、施術を行っている。顧客も増加しており、視覚障害者の新しい職域としての活躍の場が提供されつつある。

7. ベトナム盲人協会

1969年に設立され、政府から認められた唯一の障害者団体として機能している。17の支部と23000名の会員を有する[3]。盲人協会では戦争孤児などを集めて教育している。但し行政が行き届いていないことと、教員が不足していること、海外の援助が行き届かないことから難問が山積みしている。ゴム工場、つま楊枝工場、車のタイヤ製造工場など70ヶ所の作業所と教科書などの点字印刷工場、録音図書製造センターを運営している。しかしこれらの作業場での視覚障害者の職業としての自立への道は困難で、比較的高収入の得られるマッサージが日本的手法を取り入れて、特にホーチミン市の盲人協会(写真5)主催で開設している。これらは1993年に日本盲人会連合主催のアジア会議の際、日本の鍼灸、マッサージ教育を見学し、1995年にベトナム伝統マッサージ診療所を開設した。現在、日本から毎年マッサージセミナー(写真6)がボランティアで行われているが、指導者不足はいうまでもないことで、正式な指導者育成を一日も早く行うことが急務である。



写真5 盲人協会（ホーチミン市）



写真6 マッサージセミナー（ダナン省の盲学校にて）

8. 考察

ベトナムでの普通学校教育はこの数年間、特に1990年代より力を入れはじめた。しかし、教育に対する矛盾も多く地方、農村部での貧困が広がり、経済的事情から学校へ行けない子や中途退学者も増えている。また、先生の給料が極端に安いと、教員を辞職したり、副業せざるを得ない状況である。先生不足の解決策として2000年から、師範大学や師範高等学校に合格した学生には授業料免除や奨学金を与える優遇措置がなされるようになった。このような中で盲教育、聾教育などの障害者教育にもようやく力を入れてきた現況[2、3]にある。

障害児教育方法について、ベトナムには障害児教育の教員を養成する機関はない。従って障害児教育の専門家は非常に少なく[2]、教員が障害児教育を勉強できる体制も整っていないといわれている。しかし一般的に教員が自発的に始めたところは、教育方法がわからなくても発展させる可能性があり教育の資質が高い。今回視察したホーチミン市の盲学校やタンマウ知的障害児学校、ダナンの盲学校では校長以下教員の資質が高く、教育にかける情熱が並々ならぬものがある。そのような学校では

政府、各種財団の援助はもちろんであるが、海外交流が盛んであり、外国で障害者教育を学んだ人材が多いのには驚いた。1986年以降、障害児教育の支援[2、3、4]は欧米、日系のNGOにより資料提供、障害児教育に関する本の出版、ベトナムでの教育セミナーの開催、外国への研修派遣などが行なわれているからである。一方、ベトナム国内では国立教育科学院障害児教育センターが設置されており、研究スタッフは16名であるが、視覚障害児教育には3名、聴覚障害児教育には4名、知的障害者児教育者4名、肢体障害児教育者5名の研究員がいる。これらのスタッフは外国への留学経験者が多く、ベトナムでの障害児教育・研究の先進的役割をはたす機関となっている。これらの機関が中心となり、頻繁に海外交流することで障害児教育・研究の進展がみられると思われる。

また、視覚障害者の職業自立支援では、視覚障害者の大多数に職がなく、あってもホウキ、つま楊枝作製では収入も少なく自立した生活はできない状況[3、4]にある。その中でも、マッサージは盲人の職業自立として最も高収入が得られる職業であり、日本式マッサージを理解し、ベトナム式と組み合わせて、ベトナムで最適な術式を確立してもらいたい。そのための手始めとして、我々は基本的な衛生学的知識の伝授[4]はもちろんであるが、手技療法の向上に貢献し、それらの指導体制が身を結びつつあることはこの上ないよこびである。各個人の情熱度から推測すると、近い将来、衛生学的知識並びに施術法が日本よりも高くなるかも知れないことを密かに念じている。

参考文献

- [1] 桜井由身雄：もっと知りたいベトナム，第2版，弘文堂，東京，1995。
- [2] 土田佳毅：ベトナムの障害児と障害児学級・学校の状況。Bridge Asia Japan報告書：1-8，1996
- [3] 高橋昌巳：ベトナムの視覚障害者の状況。理療の科学21(1)，69-85，1998。
- [4] 高橋昌巳、久城初江他：第1回ベトナムにおける日本あん摩のセミナーを終えて。理療の科学，22(1)，60-83，2000。
- [5] 鮎京正訓：ベトナム憲法史，日本評論社，東京，1993。
- [6] 障害児の基礎調査。ベトナム国立教育科学院障害児教育センター編，ハノイ，1994。

Present Condition of the Education for the Visually Impaired in Vietnam

ICHIMAN Yoshitoshi¹⁾, KUSHIRO Hatsue²⁾ & TAKAHASHI Masami³⁾

¹⁾ Department of Acupuncture, Tsukuba College of Technology,

²⁾ Kakio Eye Clinic,

³⁾ Social Service Corporation Ounkai

Abstract : We visited a special schools for the blind in Vietnam from August 5 to 13, 2001. The system of education for the blind in Vietnam includes different forms of teaching plans and programs. We had a good opportunity to learn about the support system for disabled students in education and the social arrangements.

Key Words : Vietnam, Visually impaired, Disabled students, Education, Massage